

子ども理解のためのつぶやき心情譜を用いた音楽表現授業の提案

伊藤 理絵* 平尾 憲嗣* 北浦 恒人**

要 旨

子どものつぶやきには、言葉にならない思いが含まれている。本論では、子どもが自分の思いを表出・表現する非言語も含めて「つぶやき」とした。また、大人が、そのつぶやきに思いを寄せ、創作表現として子どもの内面を試行錯誤しながら考えたことを表現することを「うたにする」とし、保育者養成において子どものつぶやきを「うた」にすることが子ども理解を深めるという仮説的なモデル図を示した。さらに、「子どものつぶやきを「うた」にする」ことで得られる教育的効果を高めるアプローチとして「子どものつぶやき心情譜」作成し、音楽表現に関連する授業を想定した授業モデルを提案した。

キーワード：子ども理解、つぶやき、心情譜、音楽表現、授業モデル

I. 背景と目的

日本の幼児教育・保育の父とされる倉橋惣三は、子どもの姿を丁寧に見つめ、目の前の子どもとの触れ合いによる具体的な体験を情緒的な言葉で言語化、表現した人物である¹⁾。現在、幼児教育・保育ではそのような保育の原点に立ち返り、子どもの姿ベースの実践を行うことが改めて見直され、子どもの実態に基づく指導計画を作成し、保育を行うための参考となる文献に注目が集まっている（例えば、無藤・大豆生田^{2) 3) 4)}など）。

本論の筆者らは、子どもの心の声を聴き、子どもの心に共感し、子どもの心情と共にあるという一体感を実感をもって修得する授業・研修の在り方を模索し、2015年度より、保育者養成教育や現職保育者への研修において、子どものつぶやきをテーマにした実践を続けている。2017-2018年度は、平成29年度全国保育士養成校協議会ブロック研究助成を受け、その成果を報告書にまとめた⁵⁾。報告書では、子どものつぶやきに耳を傾け、そのつぶやきを「うた」として表現する授業の実践例を示し、子どものつぶやきの観察記録、エピソード記述、事例検討だけで終わらせず、子どものつぶやきから感じられる子どもの心情を言語・非言語を含めた「うた」として表現することで、試行錯誤しながら子どもの内面の世界に思いを寄せる

学生の姿がみられた。

「子どものつぶやきを「うた」にする」という表現について、報告書(p.3)では次のように述べている。「“歌”ではなく、“うた”とした意図は、子どものつぶやきを「歌」という完成されたものとして捉えようとするのではなく、子どもの発するつぶやきを、感性として受け止めた時、そこには既存の「歌」を超えた「うた」として表現されるという仮説に基づくものである。」筆者らは、子どもの思いが込められた非言語も含めた「つぶやき」について、観察や事例検討のための教材に用いるだけでなく、「子どものつぶやきを「うた」にする演習」を通して、保育者を目指す学生の子どもの心情理解を深める授業になり得ると考えている。

この演習で大切にしていることは、子どものつぶやきを「うた」にする試行錯誤の「プロセス」であり、それはまさに、到達目標ではなく方向目標とされる幼児教育・保育の目標と一致する。子ども理解というとき、完全に子どもを理解することができる大人はいないだろう。子ども理解とは、そもそも子どもの思いを完全に理解することができないという前提に立ち、だからこそ、子どもの思いを分かろうとすることを大事にすること、完全には分からないかもしれないが、それでも子どもの内面にできる限り近づこうとすることが大事であり、子どもの姿ベースに日々の幼児教育・保育を考えるということは、子どもを理

*岡崎女子短期大学 **岡崎女子大学

解する試行錯誤があつてのことである。そのことを保育者養成で修得するためのアプローチの基盤となるものが、「子どものつぶやきを“うた”にする」ことだと考えている。「子どものつぶやきを“うた”にする」ことの教育的効果として想定しているモデルを図1に示す。

まずは、子どもをよくみること、そして、子どもの姿に思いを寄せることから始める。つまり、子どもを観察し、自分の心の動いたつぶやきを記録する、もしくは、事例検討で用いる事例に示されている子どもの一言や非言語で示された思いに注目し、「なぜ、この子は、このようなことをつぶやいたのだろう？」と考えることから始める。次に、自分の心が動いた子どものつぶやきに、より一層、思いを寄せるために、子どもの言葉にならない内面世界を言語化するだけでなく、音楽等の非言語を用いて表現する。この創作表現では、どのように表現することがより子どもの内面に近づけるかと試行錯誤するプロセスが大切である。学生に「子どものつぶやきを音楽などに表して創作作品をつくらう」と教示したとしても、ここで大事になるのは、創作作品を完成させ、表現技術を高めることが主目的ではない。

「子どものつぶやきを“うた”にする」演習の第一のねらいは、あくまでも、子どもの内面に思いを寄せ、その内面を表すにはどうしたらいいかを考えることであり、その子どもの内面を表そうと試行錯

誤した結果として、音楽等の表現技術が磨かれていくということを仮定している。そのようなプロセスを辿るためには、図1の子どもの姿を理解することから創作表現を行い、また子どもの姿に戻るという往還の過程がもっとも重要となる。

もちろん、子ども理解が深まり、子どもの内面を伝えたいと思う気持ちが高まったとしても、伝える手段や伝える技術が未熟なために、子どものつぶやきを表現したいことが他者に伝わらない可能性はある。そこで鍵を握るのが、領域表現の教員の役割である。

この演習における教員の最大の役割は、学生が感じ取った子どもの思いを分かろうとすること、学生の気持ちを拾うことであり、学生に表現の意図を尋ねながら、一緒に考え、子どもの姿と学生の創作表現の往還を通して、子ども理解も表現の理解も深まるように指導することである。つまり、教員には、子どものつぶやきにも学生のつぶやきにも思いを寄せ、それをいかに学生にフィードバックするかが求められるのである。そのような教員によるフィードバックによって、子どものつぶやきに込められた子どもの心情の理解がさらに深まり、その思いを表現する技術も磨かれていく。そして結果的に、子どもの姿から創作表現へ、創作表現から創作作品へのプロセスが、相互に関連し合いながら辿られていくと

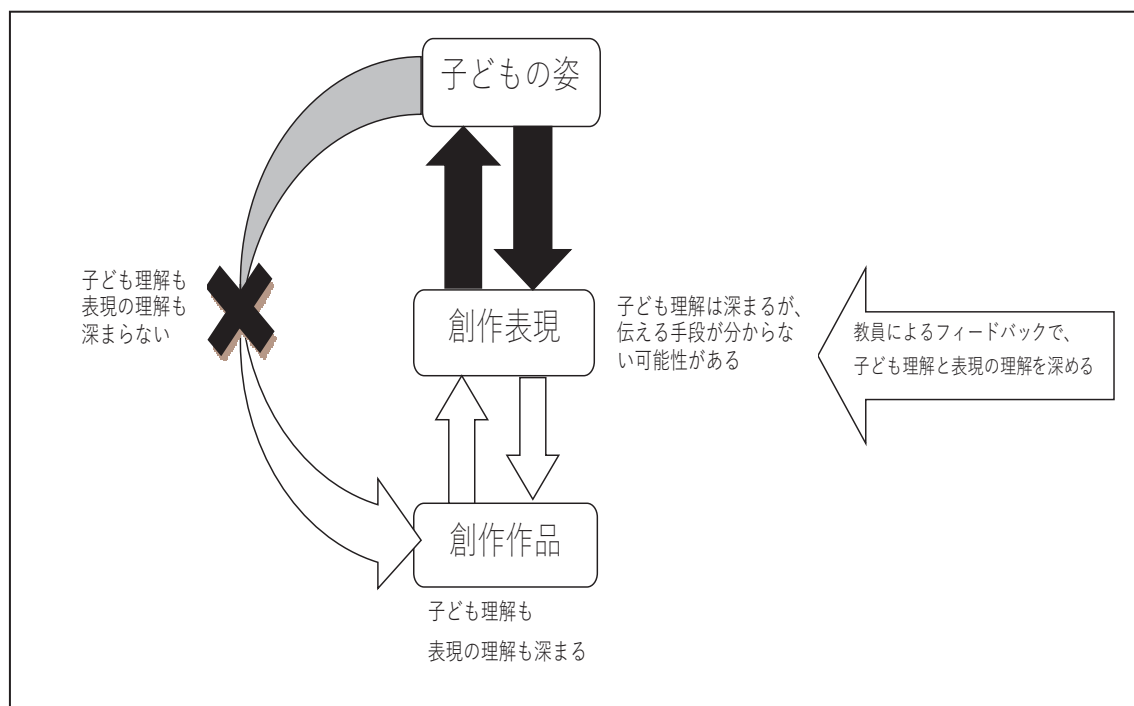


図1 子どものつぶやきを“うた”にすることで得られる教育効果仮説モデル図

考えている。

教員によるフィードバックが鍵を握るこの演習において、どのようにフィードバックするかが領域表現の教員としての専門性が問われることであり、教育効果は、教員の指導力によって左右されるといえよう。

現実的な問題として、保育者養成に携わる教員は、良くも悪くも、専門性が多様である。例えば、領域表現に関わる教員で音楽を専門とした教員であっても、学生時代の専攻や受けてきた教育の背景は様々である。そのため、担当教員の専門性や子ども観・教育観・音楽に対する関わり方によって、子どものつぶやきを“うた”にする教示に大きな差異が生まれ、そのことが、学生へのフィードバックに大きく影響する可能性も考えられる。

そこで、筆者らは教員の専攻分野に左右されず、領域表現を担当する全ての教員が一定の教育効果を得られる「子どものつぶやきを“うた”にする」演習を実践できるよう検討した。図1の「子どもの姿」と「創作表現」の試行錯誤の往還を重視した上で、子どものつぶやきの理解と表現の理解を深めることを可能にするため、新たに「子どものつぶやき心情譜」(別紙参照)を作成することにした。

以上のことから、次章では、子どものつぶやき心情譜について別紙に基づき説明し、それに続く第三章において、子どものつぶやき心情譜を用いた授業モデルを提示する。

II. 子どものつぶやき心情譜の作成

筆者らは、これまで「子どものつぶやきを“うた”にする」演習に取り組んできたが、その際、子どものつぶやきとして「あお」のエピソードを用いてきた。「あお」のエピソードは、学生が保育所での実習で実際に関わった1歳児によるつぶやきであり、言語表現が限られている子どもの精一杯の母親への思いが込められた表出・表現である。そして、実習生がその子どもの思いとつぶやきに込められた意味を理解しようと関わり続けたエピソードでもある。

心情譜を考案するにあたり、言語に表現されない思いが多く込められている「あお」のエピソードを、引き続き例として用いることとした。心情譜を説明する際に使用するワークシートを別紙に示す。

心情譜では、「あお」のエピソードでのA児の様々な動作から窺うことのできる心情の動きと、実習生の心情の動きについて、縦軸の上方向を心情的ポジ

ティブ、下方向を心情的ネガティブとし、横軸に時間経過を表した折れ線グラフを用いた。実際、人間には様々な感情があるため、3Dのグラフを用いることで、より詳細な心情の様子を示すことができると考えているが、今回は、学生にとってワークシートを用いて子どもの姿の理解を深め、かつ、心情譜作成のねらいが分かりやすく伝わることを重視し、縦軸で表す心情をポジティブ/ネガティブの2方向に設定した。

折れ線が変化する部分では、その時に発せられたつぶやき、起こった事柄、行動等を上部に示し、その背景にある心の内面のつぶやきを筆者が想像し下部に示した。「あお」のエピソードでは、A児が急に立ち上がり、窓の近くに行くところから、迎えに来た母親の所へ走っていく最後の部分までの間に、「あお」と数回つぶやいている。そのつぶやきの裏に隠れているA児の心情は、時間経過に伴い、母親がもうすぐ迎えに来るかもしれないという期待、しかし、母親が現れない落胆、母親の車がやってきた喜び、母親のぬくもりを感じる安心感へと、大きく変化していることが推測できる。また、観察可能なA児のつぶやきや行動を見守る実習生が、A児の心情を理解しようとA児に思いを寄せる中で生じる心情の変化についても推測することにより、つぶやきの意図や思いについて、具体的に窺い知ることができるのではないかと考えた。

このように、子どものつぶやきのエピソードを基に心情譜を作成する過程においては、子どもの心情理解を深めるために、子どもの内面の世界について深く洞察する視点が求められると同時に、子ども理解に向けた保育者の行動の意図を推察する視点も養うことができることが推測される。また、この心情譜を基にして、子どもや子どもと関わる保育者等の心情の変化をさまざまな表現方法で具現化する際に、表現の根本にあたる心理的動機を明確に把握することが可能であると考えている。音楽で例えるならば、音の高低の変化、音色の変化、和音やリズムの変化を伴った音楽の様子を表しているのが楽譜であるが、楽譜の音符や休符、和声進行等の裏に潜む音楽の意図を読み取り、心理的動機を具体的に言葉で書き加えたものがこの心情譜であると言い換えることができよう。そのように仮定したとき、心情譜は楽譜よりもより実際の演奏に近い存在であると考えられる。更に言い換えれば、楽譜が無くても表現の本質を失うことなく、心情譜を基に音や音楽で、

子どものつぶやきを表現することが可能であると考ええる。

そこで、これらの心情譜の特性を用いた教育的効果を期待し、心情譜作成に向け、まずは、どのような視点で作成していくかを理解するための練習課題として、学生の起床から登校までの行動や発言等をもとに、心情の動きについて振り返り、つぶやきや行動と心情の動きの関連性について確認しながら自分の心情譜作成を行うことにした(図2)。この練習課題を通して、学生は、心情譜が観察可能な言動とその背景になる内面世界の感情を描き出すものであることを理解する。

その後、実際の子どものつぶやきエピソード、例えば、学生が実習等で心が動いた子どものつぶやきや、教科書やDVD等の教材で着目した子どものつぶやきについて、つぶやきを発した子どもと、その

子どもと関わる仲間や保育者、または保護者等のつぶやきや行動から、複数の心情の変化について、その様子を視覚的に示すことができるよう子どものつぶやき心情作成シートを作成する(図3)。楽譜で例えるならば、大譜表や合唱譜のような複数の譜表である。エピソードに登場する全ての人物の心情譜を描き出すことで、子ども同士、子どもと保育者、子どもと保護者、保育者と保護者等、様々な人間関係における心情のキャッチボールについて、心情譜作成を通して明らかにすることができると考える。

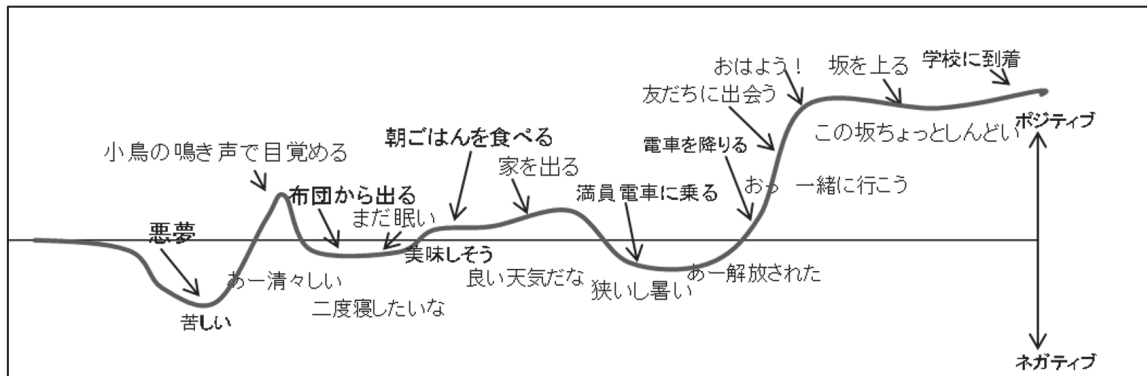


図2 心情譜作成シート練習課題例

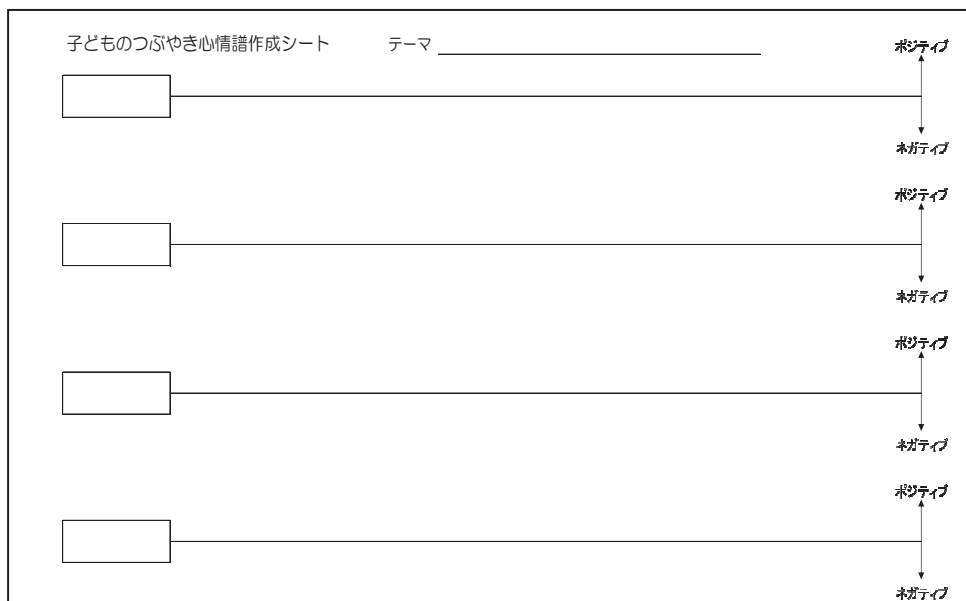


図3 子どものつぶやき心情譜作成シート (A3 サイズ)

Ⅲ. 子ども理解のためのつぶやき心情譜を用いた授業モデル

これまで保育者・教育者養成での音楽表現関連授業において実践してきた「子どものつぶやきを“うた”にする」演習を取り入れた授業を基に、前章で提案された「子どものつぶやき心情譜」を活用した授業計画モデルを表1に示す。

表1 心情譜を用いた授業計画モデル

授業回	授業内容
第1回	心情譜の解説と子どものつぶやき心情譜の作成
第2回	心情譜に基づき“うた”にする表現創作実践 創作表現発表
第3回	創作表現発表の振り返り 創作表現から創作作品へ
第4回	表現創作作品発表会 創作作品の振り返りと教員講評

本授業計画モデルの1回あたりの授業時間は90分である。創作表現実践はグループ・ワークで行い、創作表現発表と創作作品発表はそのグループによる発表を行う。1グループは4名～5名で構成する。

第1回授業では、各学生が子どものつぶやきから心情譜を作成し、グループにて討議を行い、1つの心情譜を完成させる。

第2回授業では、第1回授業で作成した心情譜を基に、声、楽器等を使用した表現の創作をグループにて実践する。

第3回授業では、創作表現の振り返りを行う。その際、教員が、その表現に対して音楽理論や保育者として子ども理解を深めるために講評を行い、子どものつぶやきと学生の思いをつなぐ音楽技術について適切なアドバイスをを行うことにより、学生はさらにブラッシュアップした表現を創作し、次の段階として、自分たちだけの表現から他者にも伝わる創作作品として完成させる。

第4回授業では、創作作品の発表を行い、さらに発表作品の振り返りを行うことで、感覚的に理解していた表現が、子どもの姿に基づいた自覚的なものになっていくと思われる。

子どものつぶやきの採取方法は観察演習、事例研究、DVD視聴と3種の方法があるが、観察演習と事

例検討は報告書⁵⁾に記載されているため、本論ではDVD視聴を活用した授業計画モデルを提案する。

心情譜を用いた授業展開例を表2に示す。なお、本授業計画はあくまでもモデルであるため、実際の授業の実態に合わせて実施する必要はあるが、教育的効果を得るためには、少なくとも3回分を充てることが望ましいと思われる。

表2 心情譜を用いた授業展開例

授業回	授業展開例
第1回	① 心情譜の解説(現代音楽の図形楽譜を参考に)と心情譜の作成練習(15分) ② DVDを視聴(約8分を3回鑑賞)し、子どものつぶやき心情譜を作成(30分) ③ グループに分かれ、各自の作成した心情譜を共有し、検討を重ね、グループで一つの心情譜を作成(30分) ④ 創作表現の準備(グループにて検討)(15分)
第2回	① 心情譜に基づき“うた”にする表現創作実践(30分) ② グループ発表と発表グループによる創作表現の工夫した点等の解説(60分)
第3回	① グループ発表の録画映像の鑑賞と教員講評とアドバイス(40分) ② 創作作品の創作実践(50分)
第4回	① 創作作品発表(30分) ② 教員講評(10分) ③ 平常授業(50分)

筆者は、これまでも「子どものつぶやきを“うた”にする」演習を行ってきており、学生からは「音楽における強弱記号の本来の必然性が分かった」等の発言があった。現在、表1を学生の実態に合わせて改良し、心情譜を用いた授業実践を行っており、その結果について分析中であるが、心情譜を作成することで、子どもの心情の移り変わりが可視化でき、子どもの心情変化を表現するのに役立ったと学生が感じる様子がみられている。また、子どものつぶやき心情譜作成を取り入れることで、音楽の根本に近づき、自ら気づく効果が得られる可能性が示唆される。

IV. まとめと今後の課題

本論では、子どもの内面にいかに近づくか、そのために有効なアプローチとして、「子どものつぶやきを“うた”にする」演習を「子どものつぶやき心情譜」を用いて行うこと、その際、“うた”という創作表現に対してフィードバックする教員の指導力が問われることを示した。

現在、第三著者により、子どものつぶやき心情譜を用いた音楽表現授業を実践し、その効果について検証を行っている。その結果によっては、図1の仮説モデルを改善する必要が出てくるかもしれないが、感覚としては、第三章に示された学生の感想(学生のつぶやき)に触れる度に、大きく外れていないように感じているところである。

加えて、「子どものつぶやきを“うた”にする演習」を通して、子ども理解も表現技術の理解も深まることを推測している。しかし、本研究の最終的な課題は、子ども理解を深める中で磨かれた表現技術を生かして、子どもの姿ベースの保育を実践するための指導にいかに繋げていくかということである。これらの残された課題に引き続き取り組み、根拠に基づいた「子どものつぶやきを“うた”にする」授業・研修プログラムの開発を行っていきたい。

付記

本論を執筆するにあたり、主として全体の構成を第一著者が検討し、第二著者が第二章と別表を、第三著者が第三章を、それ以外を第一著者が執筆した。

謝辞

仮説に基づく授業モデルを考案するにあたり、麓洋介先生（愛知教育大学）にご助言をいただきました。

引用文献

- 1) 大豆生田啓友(2017)「倉橋惣三と現代の保育—今日的意義を考える」『発達』通巻第152号、ミネルヴァ書房, pp.2-7.
- 2) 無藤隆・大豆生田啓友(編著)(2019)『子どもの姿ベースの新しい指導計画の考え方 新要領・指针对応』フレーベル館.
- 3) 無藤隆・大豆生田啓友(編著)(2019)『0・1・2歳児子どもの姿ベースの指導計画 新要領・指针对応』フレーベル館.
- 4) 無藤隆・大豆生田啓友(編著)(2019)『3・4・5歳児子どもの姿ベースの指導計画 新要領・指针对応』フレーベル館.

- 5) 伊藤理絵・北浦恒人・滝沢ほだか・平尾憲嗣・白石朝子(2018)『子どものつぶやきを“うた”にする授業実践報告書』平成29年度全国保育士養成協議会ブロック研究助成金成果報告書.

別紙

子どものつぶやき心情譜作成シート

子どもが発する言葉や行動の裏には様々な心の動きがあり、それが子どものつぶやき（言語的／非言語的な表出・表現）の動機となっています。

「なぜ、子どもがそのようなつぶやきを発したのだろう?」「子どもたちは、心の中でどんなことを思ったり感じたりしているのだろうか?」など、子どもたちの日常における様々な場面での心の動きに注目することは、保育者の視点で子どもを理解し、子どもの遊びと生活を豊かにする保育を考える基本です。

この「心情譜作成シート」を使って、あなたの心が動いた子どものつぶやきの情景を時間の流れに沿って整理し、子どもの心情にできるだけ近づいてみましょう。

以下の手順で作成してみてください。

- ① あなたの心が動いた子どものつぶやきの情景を思い浮かべましょう。
- ② その情景に登場する人物（人間以外も可）を整理し、用紙の直線の左側に、それぞれ書いてください（例：A君，実習生）。
- ③ それぞれの登場人物のポジティブ、ネガティブの気持ちの流れを折れ線グラフで描きましょう。
- ④ 折れ線の上部に、その人物のつぶやきや気持ちの動きに伴う言動（話したことや行動したこと、客観的に見えること）を書き加えましょう。
- ⑤ 最後に、折れ線の下部に、登場人物の気持ち（客観的に見えない心の内面）を推測して記述しましょう。

別紙

【例】 子どものつぶやき「あお」-A君と実習生の心の動き-

<思い浮かべた情景>

実習中に1歳児のA君が、部屋の中で急に立ち上がり、窓の近くに行き、「あお」とつぶやいていました。A君の視線より高い窓を見てつぶやいていました。実習生が「どうしたの?」と聞きました。A君は抱っこを求め、外を見ようとしていました。実習生は空の色のことかな、と思い、「空のこと?」とA君に聞いてみました。A君は「あお」と再びつぶやき、ぐずりはじめました。10分後、A君は気持ちが落ち着き、遊び始めました。するとお母さんが車でお迎えにやってきました。A君は「あお」と言いながら、お母さんの青い車を指さして、お母さんのところへ走っていきました。

